

《論 文》

# 藤村と『紅樓夢』

池間 里代子

Touson and *Dream of the Red Chamber* (Honglouloumeng)

RIYOKO IKEMA

キーワード

抄訳 (abridged translation), 第一詩集 (the first anthology), 六人の処女 (*Six maidens*)

## はじめに

島崎藤村<sup>1)</sup> (1872: 明治5年3月25日 - 1943: 昭和18年8月22日) は浪漫主義詩人として出発し、自然主義の大家として活躍し、偉大な歴史小説家で終わった。<sup>2)</sup> 日本の近代文学上重要な作家であることは言を俟たない。彼は文学修業時代に「紅樓夢の一節 風月寶鑑の辭」を『女學雑誌』に発表している。本稿ではそのいきさつと「風月寶鑑の辭」について論考を試みる。

さらに藤村にとって実質的なデビュー作であり、かつ出世作である第一詩集『若菜集』冒頭の「六人の処女」はすでに1950年代笹淵友一 (1902: 明治35年 - 2001: 平成13年) によって『紅樓夢』の影響が指摘されている<sup>3)</sup> が、本稿では一歩踏み込んで笹淵論文で取り上げられた「おつた」以外にも『紅樓夢』から何らかの影響を受けているのではないかと考えられる部分について考察する。

## 1. 藤村と『紅樓夢』との出会い

藤村は1891: 明治24年に明治学院普通学部を卒業すると、生活の面倒を見てくれた吉村忠道

が経営する伊勢佐木町の雑貨店「マカラズヤ」で働き始めた。しかし、すでに文学を志向していた藤村は共立学校時代の恩師であり、藤村を洗礼した木村熊二 (1845: 弘化2年 - 1927: 昭和2年) を通じて知り合った巖本善治 (1863: 文久3年 - 1942: 昭和17年) に、文学で身を立てたいと相談した。木村が経営する明治女学校では『女學雑誌』を発行しており、藤村は1ヶ月9円の原稿料という約束で翻訳などを発表し始めることになった。<sup>4)</sup>

以下に、『女學雑誌』に掲載された作品を列挙する。<sup>5)</sup> (下線は池間による)

明治25年

- 1月2日 フランセス・ウイラードを訪の記
- 1月2日 人生に寄す
- 2月20日 詩人ミルトンの妻
- 3月12日 小説の實際派を論ず
- 3月19日 元禄時代の韻文並作者自評
- 4月9日 詩人バイロンの母
- 5月14・28日 僧ルーサーの母 (上下)
- 6月18日 紅樓夢の一節
- 7月2日 郭公詞
- 7月30~9月24日 夏草 (シェイクスピア「ヴィーナスとアドニス」を4回にわたっ

て翻案したもの。<sup>6)</sup>

ほとんどが英語を翻訳したものであるが、6月18日の第9作目に「紅樓夢の一節」が発表された。藤村と『紅樓夢』との出会いは、木村熊二の勧めで栗本鋤雲（1822：文政5年－1897：明治30年）<sup>7)</sup>や田邊蓮舟（1831：天保2年－1915：大正4年）らについて漢学を学び始め、田邊蓮舟からは中国近代小説 — 特に『紅樓夢』 — を習ったことに端を発している。4月19日付の信州にいる木村熊二に宛てた手紙で藤村は次のように書いている。

「先生御忠告下され候ごとく、目今の処にては、栗本先生（漢文）、田邊太一先生（支那近代文学）その他元良先生<sup>8)</sup>の講話にも出で、漸々勉学の心組に御座候」<sup>9)</sup>

瀬沼茂樹（1904：明治37年－1988：昭和63年）が「藤村は漢詩を携えて本所北二葉町の自宅に訪ねて、乏しい財布の中から50銭の添削料を几帳面に払って添削を求めたり、また田邊蓮舟について『紅樓夢』などのシナの小説を読んだりしていた。」と書いている<sup>10)</sup>ことから明らかだ。

1892：明治25年をまとめると、1月から『女學雜誌』に投稿をはじめ、4月より少し前から栗本鋤雲・田邊蓮舟について勉強を始め、6月18日に「紅樓夢の一節」を発表している。また、3・4月ごろに巖本善治の紹介で北村透谷（1868：明治1年－1894：明治27年）と知り合っている。透谷が「紅樓夢の一節」にヒントを得て翌年（1893：明治26年）小説『宿魂鏡』を書いたことは既に述べた。<sup>11)</sup>10月から月給10円で英語教師として明治女学校で教えはじめ、教え子佐藤輔子と知り合う。藤村が輔子との恋愛に悩んで職を辞し、翌1893：明治26年関西方面へ漂泊の旅へ出、紆余曲折の末1896：明治29年仙台東北学院へ単身赴任していく。『女學雜誌』投稿から仙台時代を経て第一詩集『若菜集』が誕生することを鑑みれば、この5年に満

たないうちに藤村は文体を整えつつ詩作に情熱を傾けたこと、そこに『紅樓夢』が少なからぬ影響を与えていたことが指摘できよう。

なお、藤村は亡くなる2～3ヶ月前に書いた「栗本鋤雲翁四十六回忌に」という文章で以下のように回顧している。

「…訪ねて行く度によろこんで迎えて呉れ、あの芍薬の種類を多く集め植ゑてあつた庭に面した翁の書斎「借紅居」で、往時を親しく語り聞かされたことは忘れられない。」  
(昭和18年初夏の日)<sup>12)</sup>

栗本鋤雲は元来医師だったので、薬草として芍薬を集めたのかもしれないが、それを見て作ったとおぼしき「芍薬」という詩が1895：明治28年7月『ことしの夏』に収められている。

塵埃を生ひし芍薬の  
一輪庭にさきしとき  
朝には朝の露を帯び  
暮には暮の影を添ふ

いかに激しき白雨の  
いかに悲しき閃雷の  
心の闇を襲ふとも  
懼るゝなかれ吾花よ<sup>13)</sup>

佐々木冬流は「一輪の芍薬に自己を投影していることはすぐわかるだろう。音律にも工夫をこらし、日本古来の七五調を用いているが、これは全盛時代の藤村がよく用いた手法で、ここにも時代的大詩人の一面がきざしている。」と評している。

池間は『紅樓夢』には牡丹ではなく芍薬が出てくるとかつて指摘した<sup>14)</sup>が、藤村も芍薬との縁があったわけである。

## 2. 田邊蓮舟について

藤村に『紅樓夢』を教えた田邊蓮舟は、名を太一、通称を定輔、字を仲藜、号を未至夫可斎主人・倦知翁（叟）といい幕末の漢学者で三宅雪嶺（1860：万延1年－1945：昭和20年）の妻花圃（1868：明治1年－1943：昭和18年）<sup>15)</sup>の父にあたる。幕末五舟（勝海舟・山岡鉄舟・高橋泥舟・木村芥舟・田邊蓮舟）の一人とも言われる。

1831：天保2年9月16日に幕府の儒学者田邊誨輔（石庵）の第二子として生まれる<sup>16)</sup>。幼児から神童のきこえが高く、18歳で昌平黌へあがり秀才を謳われた。のち、甲府徴典館の教授になった。1859：安政6年外国方調役として幕府に仕え、1863：文久3年に外国奉行支配組頭としてパリへ赴く。再び1867：慶應3年徳川昭武に随行してパリ万博へ行った。

維新後は横浜で輸入商を始め幕府を支援した。徳川氏が駿河に移封されて、沼津に兵学校ができると召されて教授になった。1870：明治

3年、外務大丞代理公使に任ぜられた。1874：明治7年－1882：明治15年清国で仕事をし（1880：明治13年には公使館書記官、後に代理公使となる）、1883：明治16年元老院議員に任ぜられた。1890：明治23年に元老院が廃止され国会が開設されると、貴族院の勅撰議員となる。1915：大正4年9月16日逝去、従三位に叙せられた。<sup>17)</sup>享年85。

その人となりは当時の東京花柳界で「御前様」と言えば田邊太一か福地源一郎、「先生」と言えば成島柳北か福澤諭吉を指したそうである。<sup>18)</sup>風流洒脱、詩文の面でも才能を発揮させた。1878：明治11年向山黄村（1826：文政9年－1897：明治30年）が晩翠吟社を興すとこれに参加、退休の後昔話会を興して親睦の場としていたが、規模が大きくなって1895：明治28年に昔社を結んだ。会員の大江敬香（1857：安政4年－1916：大正5年）と親しくなり、彼が1898：明治31年『花香月影』を創刊するとしばしば詩文を投稿した。晩年は維新史料編纂委員として活躍。<sup>19)</sup>

著書：『幕末外交史』（1898：明治31年）／『蓮舟遺稿』詩・文（1921：大正10年）。

おおむね明治初期の漢詩人とは昵懇で、とりわけ永井荷風の父である永井禾原（1852：嘉永5年－1913：大正2年）とは仲が良く、田邊蓮舟は彼のために『來青閣記』（1913：大正2年）を書いている。<sup>20)</sup>永井禾原は『紅樓夢』を愛読していたので、彼の知己である田邊蓮舟もまた



三宅立雄 所蔵 田邊蓮舟

流通経済大学 三宅雪嶺記念資料館 協力



三宅立雄 所蔵 「蓮舟遺稿」文・詩

流通経済大学 三宅雪嶺記念資料館 協力

『紅樓夢』を愛読していたと考えられる。とりわけ、清国北京に足かけ8年間滞在していたこともあり、『紅樓夢』の読解には全く不自由しなかったのではないかと推察される。

なお、『紅樓夢』第37回－第38回に蟹宴菊詩会の場面があり、薛宝釵の提案で実字と虚字とで詩題を作ることになって「憶菊」「訪菊」「種菊」「対菊」「供菊」「咏菊」「画菊」「問菊」「簪菊」「菊影」「菊夢」「残菊」の12題が挙げられ、斬新な題だと皆がほめそやす場面がある。一方田邊蓮舟は『蓮舟遺稿』詩34頁で「九秋咏」という七言律詩9首を作っている。その題を列挙すると「秋容」「秋色」「秋影」「秋声」「秋香」「秋味」「秋気」「秋意」「秋魂」であり『紅樓夢』に「菊影」があれば「九秋咏」には「秋影」があるというように、『紅樓夢』の影響がみえる。『紅樓夢』の別名は『金陵十二釵』ともいい、12という数字に意味を与えている。田邊蓮舟の場合は重陽（9月9日）にちなんで9首にしたものと推察される。彼の詩風については別稿に譲る。

### 3. 「紅樓夢の一節 風月寶鑑の辭」について

藤村は『紅樓夢』第12回抄訳に前書きを付けた。全文を挙げる。<sup>21)</sup>

これは痴情の為に病死する賈瑞なる人物を借りて、渠が色即是空なる禪機を悟り得ざりしことを叙せる一節也<sup>22)</sup>。賈瑞もと一痴漢にして而も邪僻あるに鳳姐なる女に弄ばれ、その弄ばるゝを知らずして遂に痴情の為に死せるを寫したり。

鳳姐といふは王熙鳳なる女にしてもとより刁陰の才を有し、飽くまで賈瑞のおろかなるを知り正色をもて其言ふところを斥けず、邪言を用ゐてその心神を迷はしめ、かくてその情念を挑弄して遂にこの風月寶鑑の一段にいたり殞命の大段落に入るの脚色なり。

この風月寶鑑の辭は即ち賈瑞が鳳姐の為に辱められて家に歸りしより筆を起し痴情に生を喪ふ

光景に筆をとゞめたるなり。

そして、これに続けて

花の褪め易きは一睡の中にして尚あやにくに忘れがたきものは恋なるか。賈瑞はこゝに一生の恥辱をとりおのれの家に歸りしが、心はなほだおだやかならず。…

と物語に入っていく。ところで、この後の抄訳では恣意的にカットされている部分がある。今、伊藤漱平訳<sup>23)</sup>によって補うと、次の部分である。

①（近頃熙鳳を慕うようになっただけに）そこはそれつい例の「指さきで精を出す」ようないたずらにもはげもうというもの。

②小用をたしながらも精が漏れ、

③そこでのちには独参湯（朝鮮人参の煎じ薬。強壯・気付け用）を服ませることになりましたが、代儒のどこにそんなものをあてがうだけの資力があろう、ぜひなく榮国邸へ無心におもむきました。奥方の王氏は熙鳳に向かって二両ほど量って下げ渡すようにと言いつけました。すると熙鳳がいますには、「つい、一昨日のこと、そっくりご後室さまのお薬のなかに調合してしまいました。あの丸ごとの分も、奥方さまが別にしておいて楊提督の奥方の調剤用にお届けせよと仰せでしたので、あいにくと昨日、もう届けさせてしまったあとでございますし…」奥方の王氏はそこで、「たとえうちには切れているにしても、あんたのお姑さま（邢氏）のところへ使いをやって聞き合せなさい。都合によっては珍兄さんのあちらのお屋敷へもすこしわけてもらいにやったらよろしい、なんとかして寄せ集めるのです。これで服ませてよくなったとなると、人ひとりの命を救った勸

定で、それだけあんたも功德をつむことになるわけだし…」ところが熙鳳はそれを聞き流したまま、人をもらいにやることもせず、申しわけに肩や鬚のところを何処か寄せ集めて人に持参させ、「奥方様からのくだされ物、これだけであとはございませんから」とだけ口上をいませます。そうしておいて奥方には「みなさんからわけていただいたのを寄せ集め、二両ほどにして届けさせました」と報告するのです。ところで賈瑞は、いまさらながら命惜しやの心がつのり、薬と名のつくもので服用してみないものはないくらいでしたが、それもみすみす金を使うだけのことで効目はなし…。

④（鏡のなかにはいりこんだ心地になり）熙鳳相手にしっぽり濡れ、

⑤（馬鹿に汗をかいたような気がしましたが）それもそのはず、したにはどろりとひとかたまりの精を漏らしていたのです。それでいてこれだけではいかにものたらず

⑥身体のしたには、ぐっしょり一面にひんやりした精を漏らしていました。そこではじめて急ぎ着物を着せ寝台をかつぎ出すのでした<sup>24)</sup>

①②はキリスト教系の『女學雑誌』にふさわしくないと判断してカットしたのだろうということは想像できる。お茶の水女子大学名誉教授中山時子（1922：大正11－）が学生時代北京で『紅樓夢』を習った鮑女史は時々「ここからここは読みません」といって飛ばしたそう<sup>25)</sup>。おそらくこのような部分が飛ばされたのだろう。③は王夫人が仏教信者ということもあり、布施の心で優しい面を見せているのに対して、王熙鳳が意地悪で策士だという描写だが、「風月寶鑑」という筋からそれていると判断し、カットしたものと思われる。

藤村は前書で「賈瑞もと一痴漢にして…遂に

痴情の為に死せるを寫したり」と言っているが、この「痴漢」「痴情」について注目すべきである。なぜならば賈瑞を「痴」と言うことこそが、この翻訳を発表する動機とも言えるからである。藤村は、賈瑞が「痴」をコントロールすることができず、「痴」によって命を落としたことを言いたかったのではないだろうか。それは読者に対してという側面もあるが、「紅樓夢の一節 風月寶鑑の辭」を発表した真意は、自らを戒めるという側面があった。その理由は後述する。

なお、抄訳中一ヶ所だけ原文をアレンジしているところがある。それは物語の終盤で風月寶鑑が焼かれようとする場面である。

藤村訳：うたてや何の為に我がこの鏡を焼き捨てしといふうち、かの鏡空中より家の外に飛び出でぬ。

伊藤訳：「…なにを血まよってこのわしを焼こうとしなさる？」と泣き嘆いているところへ、例のびっこ道士がおもてから駆けこんできて、…鏡を取りあげ手中に収めると、飄然と立ち去るのでした。

原文では、ぼやいている鏡をびっこ道士が救いに来るのだが、藤村訳では家から鏡が飛び出ることになっている。ここは風月寶鑑が「妖鏡」であるということを強調するために行なった藤村の創作だろうか。あるいは抄訳を発表する際に、師である田邊蓮舟と相談したのかもしれない。いずれにせよ、抄訳という形ながら、『紅樓夢』本邦初の和訳が藤村の手によって世に出たことは事実である。

#### 4. 『若菜集』「<sup>をとめ</sup>六人の処女」について

##### 4-1. 第5篇「おつた」

藤村の第一詩集『若菜集』は1897：明治30年8月に春陽堂より刊行された。これは前年から『文学界』へ掲載していたもの（48号）をまと



めたものである。その中で「おえふ」「おきぬ」「おさよ」「おくめ」「おつた」「おきく」の6編は連作と思われ、はじめは「うすごほり」と題していたが、初版『若菜集』では題を省いて各篇の題のみになり、1917：大正6年『藤村詩集』ではじめて「六人の<sup>をとめ</sup>処女」と改題された<sup>26)</sup>。伊藤漱平（1925：大正14年－2009：平成21年）によると、「おつた」が『紅樓夢』の影響を受けていると笹淵友一が直接伊藤に指摘したそうである<sup>27)</sup>。なお、笹淵は『「六人の処女」研究』<sup>28)</sup>を1960：昭和35年『文学界』とその時代」下においてダイジェスト採録している。<sup>29)</sup>

笹淵によれば、「おつた」第1連の出典を『紅樓夢』第18回の妙玉だと推定し、終連の「智恵の石」を通靈宝玉になぞらえている。彼は明確には指摘していないが、全ての連に出てくる「若き聖」を賈宝玉だと推測したのではないだろうか。（下線は池間による）

「おつた」

花灰見ゆる春の夜の  
すがたに似たる吾命  
朧々に父母は  
二つの影と消えうせて  
世に孤児の吾身こそ  
影より出でし影なれや  
たすけもあらぬ今は身は  
若き聖に救はれて  
人なつかしき前髪の  
処女とこそはなりにけれ …第1連

若き聖ののたまはく  
時をし待たむ君ならば  
かの柿の実をとるなかれ  
かくいひたまふうれしさに  
ことしの秋もはや深し  
まづその秋を見よやとて  
聖に柿をすゝむれば  
その口唇にふれたまひ

かくも色よき柿ならば  
などかは早くわれに告げこぬ …第2連

若き聖ののたまはく  
人の命の惜しからば  
嗚呼かの酒を飲むなかれ  
かくいひたまふうれしさに  
酒なぐさめの一つなり  
まづその春を見よやとて  
聖に酒をすゝむれば  
夢の心地に酔ひたまひ  
かくも楽しき酒ならば  
などかは早くわれに告げこぬ …第3連

若き聖ののたまはく  
道行き急ぐ君ならば  
迷ひの歌をきくなかれ  
かくいひたまふうれしさに  
歌も心の姿なり  
まづその声をきけやとて  
一ふしうたひいでければ  
聖は魂も酔ひたまひ  
かくも楽しき歌ならば  
などかは早くわれに告げこぬ …第4連

若き聖ののたまはく  
まことをさぐる吾身なり  
道の迷となるなかれ  
かくいひたまふうれしさに  
情も道の一つなり  
かゝる思を見よやとて  
わがこの胸に指ざせば  
聖は早く恋ひわたり  
かくも楽しき恋ならば  
などかは早くわれに告げこぬ …第5連

それ秋の日の夕まぐれ  
そゞろあるきのこゝろなく  
ふと目に入るを手にとれば  
雪より白き小石なり  
若き聖ののたまはく

智恵の石とやこれぞこの  
あまりに惜しき色なれば  
人に隠して今も放たじ<sup>30)</sup>

…第6連

「おつた」には確かに「道」という言葉によって妙玉を思い浮かべる箇所もあるが、例えば第1連「若き聖に救はれて」などは林黛玉を彷彿する。林黛玉の前世は絳珠草という仙草で、賈宝玉の前世である神瑛侍者から甘露を注いでもらった恩返しのために現世で流離している、という設定になっている。このことを踏まえれば「若き聖に救はれて」が林黛玉を指していることは明白ではないか。また、第1連において妙玉の経歴と似ているとした「朧々に父母は二つの影と消えうせて」と「(妙玉が)ただいまでは両親ともに世を去られ、…」<sup>31)</sup>を指していると笹淵は言うが、林黛玉の両親(先に母の賈敏、続いて父の林如海が逝去)も亡くなっている。ゆえに、「おつた」のモデルは妙玉だけではなく、黛玉からも借用して妙・黛二人のイメージから「おつた」を創作したのではなかったか。

#### 4-2. 「おつた」以外の詩について

笹淵友一は「おつた」が『紅樓夢』を意識して作られたと指摘したが、他の5篇においても私見では『紅樓夢』が下敷きになっている。むしろ、創作過程においては作者の体験した物事や読んだ書物すべてが影響していることは当然であるが、その中でとりわけ『紅樓夢』の影響が濃くみえる部分を挙げたい。そして、従来の読みと『紅樓夢』下敷き説との対照を試みる。なお、「おつた」同様、『島崎藤村集(一)』筑摩書房 1968:昭和43年に拠った。

##### ○「おえふ」

処女ぞ経ぬるおほかたの  
われは夢路を越えてけり  
わが世の坂にふりかへり  
いく山河をながむれば

…第1連

水静かなる江戸川の  
ながれの岸にうまれいで  
岸の桜の花影に  
われは処女となりにけり

…第2連

都鳥浮く大川に  
流れてそゝぐ川添いの  
白堊さく若草に  
夢多かりし吾身かな

…第3連

雲むらさきの九重の  
大宮内につかへして  
清涼殿の春の夜の  
月の光に照らされつ

…第4連

雲を彫め濤を刻り  
霞をうかべ日をまねく  
玉の台の欄干に  
かゝるゆふべの春の雨

…第5連

さばかり高き人の世の  
耀くさまを目にも見て  
ときめきたまふさまぎまの  
ひとのころもの香をかげり

…第6連

きらめき初むる暁星の  
あしたの空に動くごと  
あたりの光きゆるまで  
さかえの人のさまも見き

…第7連

天つみそらを渡る日の  
影かたぶけるごとくにて  
名の夕暮れに消えて行く  
秀でし人の末路も見き

…第8連

春しずかなる御苑生の  
花に隠れて人を哭き  
秋のひかりの窓に倚り  
夕雲とほき友を恋ふ

…第9連

ひとりの姉をうしなひて

大宮内の門を出で  
けふ江戸川に来て見れば  
秋はさみしきながめかな …第10連

桜の霜葉黄に落ちて  
ゆきてかへらぬ江戸川や  
流れゆく水静にて  
あゆみは遅きわがおもひ …第11連

おのれも知らず世を経れば  
若き命に堪へかねて  
岸のほとりの草を藉き  
微笑みて泣く吾身かな …第12連

#### 【従来の読み】

- ・「哭き」と「泣く」とを対照すれば実感の相違は明らかであらう。この「微笑みて泣く」はシエレーの「雲雀の歌」からの着想ではあるまいか。(笹淵友一)<sup>32)</sup>
- ・現実の自己の生活がはるか王朝の夢幻の生活に置換えられて、そこで人の世の栄枯盛衰を知り、自分もまた知らずに世を経て、現実に目醒めると共に先行きに苦悩する姿が詠われた。(高阪薫)<sup>33)</sup>
- ・「おえふ」の半生は、そのまま藤村自身の、これまでの心の関歴であろう。…詩の中に自伝的な要素を持ち込まれたこと…(水本精一郎)<sup>34)</sup>
- ・(おえふは)世の浮沈とは別次元に生きるみずからの「若き命」を自覚し、心に湧き上がる情熱の息吹に希望と恐れとを感じて「微笑みて泣く」のである。(高橋昌子)<sup>35)</sup>

#### 【紅樓夢下敷き説】

- ・第1連「われは夢路を越えてけり」・第3連「夢多かりし吾身かな」からは、『紅樓夢』の舞台設定が二重構造、すなわち「太虚幻境」という天上界と「大観園」に象徴される地上界の二つであること、を彷彿する。『紅樓夢』主人公の賈宝玉は天上界の神瑛侍者であった。宝玉はしばしば夢の中で天上界に行

き、最終的には自分が天上界から来た身であることを悟る。

- ・第4連と第6連は、「大宮内に仕え、身分の高い人と身近に接した」過去を言っている。『紅樓夢』の中では、主人公の姉で宮中に入り貴妃となった賈元春を指すと容易にわかる。さらに第10連「ひとりの姉をうしなひて」は、賈宝玉の立場に立ち、姉が薨逝したことを暗示している。
- ・第8連「秀でし人の末路も見き」は、『紅樓夢』天上界「薄命司」にある冊子「金陵十二釵正冊・副冊」によって、親しい女性たちの末路を見たことに通じている。
- ・第9連の「花に隠れて人を哭き」の「哭」と、最終第12連の「微笑みて泣く吾身かな」の「泣」とに注目すべきであろう。笹淵説では具体的な「実感の相違」が示されていない。「哭」は亡き人を悼んで「なく」と取るべきであり、『紅樓夢』では宝玉の侍女だった晴雯が病死し、芙蓉の女神となったと思ひこみ宝玉が彼女を祭りつつ哭したシーンが想起される。一方、「岸のほとりの草を藉き 微笑みて泣く吾身かな」の「泣」は、『紅樓夢』の発端であるところの神瑛侍者が絳珠草という仙草に甘露をかけてやった、その恩を涙で返したい、というモチーフに基づいている。ゆえに「微笑みて泣く」は矛盾しているようにみえるが、実は「泣く」ことによって恩返しをしているので「微笑み」の心境になるわけである。
- ・なお、「おえふ」には江戸川・都鳥・大川など江戸らしい語が出てくるが、それらによって美的感覚を漂わせるとか、読者に身近な単語を用いることによって親近感を増さしめる、などの効果をねらったものであろう。

#### ○「おきぬ」

みそらをかける猛鷲の  
人の処女の身に落ちて  
花の姿に宿かれば  
風雨に渴き雲に饑ふ



天翔るべき術をのみ  
願ふ心のなかれとて  
黒髪長き吾身こそ  
うまれながらの盲目なれ …第1連

芙蓉を前の身とすれば  
泪は秋の花の露  
小琴を前の身とすれば  
愁は細き糸の音  
いま前の世は鶯の身の  
処女にあまる羽翼かな …第2連

あゝあるときは吾心  
あらゆるものをなげうちて  
世はあぢきなき浅茅生の  
茂れる宿と思ひなし  
身は術もなき蟋蟀の  
夜の野草にはひめぐり  
たゞいたづらに音をたてゝ  
うたをうたふと思ふかな …第3連

色にわが身をあたふれば  
処女のこゝろ鳥となり  
恋に心をあたふれば  
鳥の姿は処女にて  
処女ながらも空の鳥  
猛鶯ながら人の身の  
天と地とに迷ひるる  
身の定めこそ悲しけれ …第4連

#### 【従来の読み】

- ・二次元的世界観の苦悩が托されてゐる。…輪廻といふよりもむしろパラダイス・ロストであり、失はれたる黄金時代に対するロマンティズムの思慕なのである。…盲目といふのは知性の照明も束縛も受けない無目的な生本能を意味するであらう。(笹淵友一)<sup>36)</sup>
- ・前世は鶯の身であるが、美しい「うまれながらの盲目」として、天界にも地上界にも安住の場を見出せぬまま漂泊し、かつ精神と肉欲のはざままで苦悩する姿が詠われたりする。

(高阪薫)<sup>37)</sup>

- ・前世が「猛鶯」で、今は「盲目」の「処女」とであると言ひ、前世と現世、天上と地上との交響を歌うのだが、…その交響、交錯の地点そのものを見つめようとしているのである。(水本精一郎)<sup>38)</sup>
- ・天をかけめぐるといふ心、自由を渴望する者はすなわち世に処する術を奪われた存在である、という認識を示している。(高橋昌子)<sup>39)</sup>
- ・「おきぬ」は女性という肉体に束縛され、自由に羽ばたくことが出来ない。…詩人は若き処女に化身することで、束縛多い現実を表現している。(岸規子)<sup>40)</sup>

#### 【紅樓夢下敷き説】

- ・第1連の「猛鶯」「生まれながらの盲目」という言葉に惑わされてか、非常に難解な詩であるとされてきた。しかし、これも『紅樓夢』の中で藤村が抄訳した第12回にも登場した王熙鳳がモデルだと仮定すれば解釈は簡単だ。「鳳」があることと口八丁手八丁の男勝りで怖いものなし、場合によっては絡んでくる者どもを死地に追いやるしたたかさを持つ女性である。彼女のキャラクターから「猛鶯」という、恐ろしげな猛禽を連想する、攻撃的な譬えがなされたのであろう。「生まれながらの盲目」とは、彼女は名こそ学問があるような感じがするが、実際には無学文盲である。そのことを「盲目」と表現した。ゆえに、鶯が前世だったという説はこじつけに過ぎず、両者は一人の女性を形容する言葉と捉えるべきであろう。
- ・同じく第1連「風雨に渴き雲に饑ゑ」は、『紅樓夢』を引き合いに出すまでもなく、「雲雨」といえば肉体上の情交を指すので、高阪薫の「精神と肉欲のはざままで苦悩する姿」という解釈が当たっているように思う。
- ・最終第4連「身の定めこそ悲しけれ」は、王熙鳳の末路が憐れであることを言っている。

つまり、「おきぬ」に用いられている人物形  
象はほぼ王熙鳳が下敷きになっていると言っ  
ても過言ではない。

○「おさよ」

潮さみしき荒磯の  
巖陰われは生れけり …第1連

あしたゆふべの白駒と  
故郷遠きものおもひ …第2連

をかしくものに狂へりと  
われをいふらし世のひとの …第3連

げに狂はしの身なるべき  
この年までの処女とは …第4連

うれひは深く手もたゆく  
むすばゝれたるわが思 …第5連

流れて熱きわがなみだ  
やすむときなきわがこゝろ …第6連

乱れてものに狂ひよる  
心を笛の音に吹かん …第7連

笛をとる手は火にもえて  
うちふるひけり十の指 …第8連

音にこそ渴け口唇の  
笛を尋ぬる風情あり …第9連

はげしく深きためいきに  
笛の小竹や曇るらん …第10連

髪は乱れて落つるとも  
まづ吹き入るゝ氣息を聴け …第11連

力をこめし一ふにに  
黄楊のさし櫛落ちてけり …第12連

吹けば流るゝ流るれば  
笛吹き洗ふわが涙 …第13連

短き笛の節の間も  
長き思のなからずや …第14連

七つの情声を得て  
音をこそきかめ歌神も …第15連

われ喜を吹くときは  
鳥も梢に音をとゞめ …第16連

怒をわれの吹くときは  
瀬を行く魚も淵にあり …第17連

われ哀を吹くときは  
獅子も涙をそゝぐらむ …第18連

われ楽を吹くときは  
虫も鳴く音をやめつらむ …第19連

愛のこゝろを吹くときは  
流るゝ水のたち帰り …第20連

悪をわれの吹くときは  
散り行く花も止りて …第21連

窓の思を吹くときは  
心の闇の響あり …第22連

うたへ浮世の一ふしは  
笛の夢路のものぐるひ …第23連

くるしむなかれ吾友よ  
しばしは笛の音に帰れ …第24連

落つる涙をぬぐひきて  
静にきゝね吾笛を …第25連

【従来の読み】

・人生苦が芸術によって救はれようとし、又救

はれてゐる。かういふおさよも亦藤村の人間像を荷負つてゐる。(笹淵友一)<sup>41)</sup>

- ・老嬢として悲しい人生体験をもち、笛に託して内奥にひそむ情念を吹き晴らす。(高阪薫)<sup>42)</sup>
- ・おさよは乱れる思いの故に世から「狂」とされる。彼女はみずからの悩ましさを笛に託してうたう…「ものぐるひ」といわなければならない。(高橋昌子)<sup>43)</sup>
- ・芸術の神に憑かれている。(岸規子)<sup>44)</sup>

#### 【紅樓夢下敷き説】

- ・「おさよ」に該当するとおぼしき登場人物は『紅樓夢』に直接的な形では見当たらないが、第16連～第19連の「喜怒哀楽」が『紅樓夢』第28回の酒令に類似している。引用すると：

「(賈宝玉)ではと、悲・愁・喜・楽の四字を読みこむとしましょうか、どれも婦人のこととして仕立てるのです。そうしておいて、この四字のこころを説明するわけですね。…」<sup>45)</sup>とある。

- ・笛ではないが、楽器となると『紅樓夢』では琴の蘊蓄を披露する林黛玉が想起される。第87回では独奏しながら詩を吟ずる黛玉の様子を妙玉と宝玉とが密かに聴いて論評する描写がみえる。「(妙玉)…それにしても、なんと憂いの深いことか!」「(宝玉)…あの人の声の調子を聞いていると、なんだか悲しみが過ぎるような気がしますね」…「(黛玉)人の子の世に在るは 輕塵にも似て 天の上と 人の世と 宿縁ぞ深き 宿縁ぞ深き 思い果てなく この素心 いかんぞや 天の上の月と」<sup>46)</sup>黛玉は自らの憂いを琴を弾き語ることによって晴らそうとするも、直後に弦が切れてしまい、ひそかに聴いていた妙玉と宝玉は不吉な予感を覚える。「おさよ」にあらわれた、芸術によって自己を救済しようとする姿勢は『紅樓夢』黛玉の琴に通じるものがあるのではないか。

#### ○「おくめ」

こひしきまゝに家を出で  
こゝの岸よりかの岸へ  
越えましものと来て見れば  
千鳥なくなり夕まぐれ …第1連

こひには親も捨てはてゝ  
やむよしもなき胸の火や  
鬢の毛を吹く河風よ  
せめてあはれと思へかし …第2連

河波暗く瀬を早み  
流れて巖に砕くも  
君を思へば絶間なき  
恋の火炎に乾くべし …第3連

きのふの雨の小休なく  
水嵩や高くまさるとも  
よひよひになくわがこひの  
涙の滝におよばじな …第4連

しりたまはずやわがこひは  
花鳥の絵にあらじかし  
空鏡の印象砂の文字  
梢の風の音にあらじ …第5連

しりたまはずやわがこひは  
雄々しき君の手に触れて  
嗚呼口紅をその口に  
君にうつさでやむべきや …第6連

恋は吾身の社にて  
君は社の神なれば  
君の祭壇の上ならで  
なににいのちを捧げまし …第7連

砕かば砕け河波よ  
われに命はあるものを  
河波高く泳ぎ行き  
ひとりの神にこがれなむ …第8連

心のみかは手も足も  
 吾身はすべて火炎なり  
 思ひ乱れて嗚呼恋の  
 血筋の髪の波に流るゝ …第9連

みだれてながき  
 鬢の毛を  
 黄楊の小櫛に  
 かきあげよ …第4連

## 【従来の読み】

- ・おくめは一切の人倫に背いて盲目的な恋の情熱に身を焼く女である。(笹淵友一)<sup>47)</sup>
- ・内奥の情欲に苦しむ女ではなく、身も心も燃えつくさんばかりの激しい恋の情熱の持ち主で、…積極的、能動的な官能の衝迫に身をゆだねんとする。(高阪薫)<sup>48)</sup>
- ・詩人は恋の情熱を高らかに歌うことが出来たのである。恋の炎に、命の燃焼を重ねているともいえる。(岸規子)<sup>49)</sup>

## 【紅樓夢下敷き説】

- ・第7連「恋は吾身の社にて 君は社の神なれば」や第8連「ひとりの神にこがれなむ」の箇所は、賈宝玉（前世は神瑛侍者）と林黛玉（前世は絳珠草）との関係を連想する。第4連でも「涙の滝」という表現があり、林黛玉に生まれ変わった絳珠草が甘露の恩を涙で返すというモチーフをなぞっているようだ。

## ○「おきく」

くろかみなかく  
 やはらかき  
 をんなごゝろを  
 たれかしる …第1連

をとこのかたる  
ことのをは  
まこととおもふ  
ことなかれ …第2連

をとめごゝろの  
 あさのくみ  
 いひもつたふる  
 をかしさや …第3連

あゝ月ぐさの  
 きえぬべき  
 こひもするとは  
 たがことば …第5連

こひて死なんと  
 よみいでし  
 あつきなさは  
 たがうたぞ …第6連

みちのためには  
 ちをながし  
 くには死ぬる  
 をとこあり …第7連

治兵衛はいづれ  
 恋か名か  
 忠兵衛も名の  
 ために果つ …第8連

あゝむかしより  
 こひ死にし  
 をとこのありと  
 するや君 …第9連

をんなごゝろは  
 いやさらに  
 ふかきなさけの  
 こもるかな …第10連

小春はこひに  
 ちをながし  
 梅川こひの  
 ために死ぬ …第11連

お七はこひの

ために焼け  
高尾はこひの  
ために果つ …第12連

かなしからずや  
清姫は  
蛇となれるも  
こひゆゑに …第13連

やさしからずや  
佐容姫は  
石となれるも  
こひゆゑに …第14連

をとこのこひの  
たはぶれは  
たびにすてゆく  
なさけのみ …第15連

こひするなかれ  
をとめごよ  
かなしむなかれ  
わがともよ …第16連

こひするときと  
かなしみと  
いづれかながき  
いづれかみじかき …第17連

#### 【従来の読み】

- ・これまでの叙事詩的構想とちがって、おきくに托された、女性の純情に対する述懐である。…藤村自身の懺悔を含んだ女性讃歌であったと見るべきであらう。(笹淵友一)<sup>50)</sup>
- ・「おきく」の女性像、恋愛観はイメージとして浮かんでこないといわれる。…女の深い情愛に対する男の一時の浮調子な愛を女性に警告する。…男性の愛情に対する女性の不信任がみられていることも注目すべきことだ。(高阪薫)<sup>51)</sup>
- ・男女の優劣を歌ったものだが、詩人の奥に働

いているものは、世間の男女観に対する批判意識であったと言えるだろう。(水本精一郎)<sup>52)</sup>

#### 【紅樓夢下敷き説】

・第2連「をとこのかたる ことのはを まこととおもふ ことなかれ」と第16連「こひするなかれ をとめごよ かなしむなかれ わがともよ」からは、確かに高阪薫・水本精一郎の言うように、女性に対する警告が読み取れる。藤村は第11連～第14連において具体例(小春・梅川・お七・高尾・清姫・佐容姫)を挙げている。一方『紅樓夢』でも男性によって死地に追いやられた女たち—尤二姐・尤三姐の姉妹—がいる。姉の尤二姐は賈璉の妾となり、正妻である王熙鳳の怒りを買ひ、追い詰められて生金を吞んで自害する。妹の尤三姐は「あばずれ」という悪評があったが、柳湘蓮を一途に思いつめ身を慎むも、以前の悪評のために婚約を破棄され、恥じて自刎し果てた。藤村の「おきく」は報われない女の恋情を戒めている、という読み方で良いが、そこに尤二姐・尤三姐の姿が投影されていると考えることもできるのではないだろうか。

#### 4-3. 「六人」の意味

さらに、題名の変更について考察を加えたい。前述の通り、当初は「うすごほり」→無題→「六人の処女」と変遷しており、そこに藤村なりの意図があったと笹淵はすでに指摘している。<sup>53)</sup> すなわち、「うすごほり」は香川景樹(藤村の父が師事し、藤村も傾倒していた桂園派歌人。1768: 明和5 - 1843: 天保14)が1815: 文化12年12月3日に判をした三十三番歌合の題が「うす氷」であったこと、西鶴の「五人女」と内容が似ていること、「処女」とは「若い女」のことなどから、「六人の処女」という新題は西鶴「五人女」になぞらえたと指摘している。だが、「おつた」などの作品に『紅樓夢』が下敷きになっていると考えられる点がある以上、



『紅樓夢』の別名<sup>54)</sup>でもある「金陵十二釵」を意識して「六人の処女<sup>をとめ</sup>」としたと考える方がより自然ではないだろうか。

『若菜集』が発表される前年の11月、『江湖文学』に笹川臨風(1870:明治3年-1949:昭和24年)が「金陵十二釵」という一文を寄せている。文中、書名を『紅樓夢』と紹介しその中の秀でている女性12名を「金陵十二釵」という、と言っている。<sup>55)</sup>おそらく藤村も『若菜集』のなかの「六人の処女(をとめ)」という意識があったのだろう。「おえふ」と「おくめ」は類似しているもののそれぞれ異なった文体を用いることにより、6人の個性を描いた作品に「六人」というタイトルを付けた意味とは、「十二釵」という存在を意識したからであると想像できる。

## 5. “スタデイ” された『紅樓夢』

藤村は明治初期のおおきな時代のうねりの中で、自分の進むべき道を模索し続けた。その表われが「習作=スタデイ」である。では、藤村にとって『紅樓夢』はどのような意味をもち、どのような意図をもって発表したのだろうか。

まず、『女學雑誌』に投稿された「紅樓夢の一節 風月寶鑑の辭」について。藤村が抄訳した第12回は『紅樓夢』の中でも旧稿部分らしく、これを取り上げた理由は従来議論されていない。私は佐藤三武朗(1944:昭和19年-)の言う「藤村は早くも愛の破壊的性質に気付いていたのである」<sup>56)</sup>という説が的を射ているのではないかと考える。周知の通り、藤村は父に対して追慕とともに恐怖も感じていた。父と同じ血が自分に流れていることの嫌悪を持っていたのである。明治学院時代の前半は学生生活を謳歌したが、後半では内省するあまり鬱気味になったと言われる。その大きな理由が「愛の破壊的性質」を自覚したことであろう。この視点から見ると、3章で述べたように『紅樓夢』第12回の「風月寶鑑」によって狂死した賈瑞は、「痴」をコントロールできずに死に至った者で

ある。これを言い換えれば「愛の破壊的性質」をコントロールできない者は死を招く、といえよう。藤村はそこに気づいて賈瑞を自らの精神的分身であると認め、これを発表することで自らの戒めとしたのではなかったか。

次に、『若菜集』「六人の処女<sup>をとめ</sup>」について。この作品群には『紅樓夢』の影響が大きいことは前述した通りである。その理由は、文学修業時代に田邊蓮舟から手ほどきを受けた『紅樓夢』講読が意外に藤村の心に深く浸透したのではないかと考えられる。藤村の漢学・中国近代文学修業は巖本に勧められてという側面もあったが、『紅樓夢』は彼にとって単に文学知識を獲得する手段だけではなく、創作に必要なインスピレーションをも刺激したのではないだろうか。『紅樓夢』に登場する女性たちはそれぞれが個性的であり、自分の考えを持つものが多い。そこに“桂園發展文体”とでも呼ぶべき文体でもってできたのが「六人の処女<sup>をとめ</sup>」であるといえよう。

## おわりに

藤村の「紅樓夢の一節 風月寶鑑の辭」は、文学で身を立てることを決意した彼に最初に与えられたチャンスである『女學雑誌』に掲載された。これは田邊蓮舟と出会わなかったら不可能であった。藤村は文学修業として、欧米文学はもちろんのこと王羲之・杜甫・李白・西行・芭蕉などを「スタデイ」した。<sup>57)</sup>しかし、『紅樓夢』も「スタデイ」していたことはあまり知られていなかった。藤村が田邊蓮舟によって『紅樓夢』を知り読み、賈瑞に自らを投影していたとおぼしいこと、第一詩集『若菜集』では従来「おつた」が『紅樓夢』の影響があるとされていたが、他の作品にも影響があるということを描した。

藤村は芭蕉を見つめ、そこから西行を目指したと言われる。そこには旅と創作との関連が見いだされた。柳田国男(1875:明治8年-1962:昭和37年)が旅に関して“自己教育”的

な側面として捉え、外へ外へと向かっていったのに対して、藤村の旅は危機からの脱出や自己回復のため、つまり内面を見つめるために必要な空間的・時間的隔離が旅であった。<sup>58)</sup> 西行の先には李白・杜甫が見えていたに違いない。彼らに対する憧憬から中国の『紅樓夢』をスタディしたのは当然の帰結と言っても良いだろう。『紅樓夢』が自ら求めたものではなく、田邊蓮舟によって教授されたものであったとしても藤村はそこに創作の種を見出し、作品化することができた。それだけではなく、夭逝した親友北村透谷の最後の小説にもこの「スタディ」によって影響を及ぼした。藤村は透谷を悼む意味も含めて第一詩集冒頭に「六人の処女<sup>をとめ</sup>」を置き、文学活動のスタートを切ったのではなかったか。

付記：写真の使用を許可して下さった流通経済大学に謝意を表明するものである。

なお、田邊蓮舟甥の田邊朔郎博士の嫡孫である田邊康雄氏ならびに、三宅雪嶺・花圃の嫡孫である三宅立雄 流通経済大学名誉教授にご教示をいただいた。感謝に堪えない。

## 参考

兼清正徳『香川景樹』1973：昭和48年 吉川弘文館  
田辺康雄『びわ湖疎水にまつわる、ある一族のはなし』  
1991：平成3年 私家本  
尾辻紀子『幕末外国奉行田辺太一』2006：平成18年  
新人物往来社

## 注

1) 『新小説』第9号「雅號由來記」によれば、「蔭の深くして多きを好めるよりおほつかなき花のかげのたゝずまひかりに名けて藤村といふは、たとへば庭草のしげれるほとり柄杓の水をまいても平氣の平左面の皮のあつかましき名つけて蛙といふにおなじこと、これを蛙といへばかしましく、花鳥の情に似ず蟋蟀の韻にあらず、これを藤村といへばふみのはやしのかたすみにありてわけもなきいたづらたゝたゝ大聲をして君を驚かさと思ふばかりにこそ。」だそうだ。石川巖『藤村書誌』大観堂書店 1940：昭和15年 p.117 他説には佐藤輔

子の「藤」を取ったとある。

- 2) 佐々木冬流『島崎藤村』表紙より 清水書院1966：昭和41年
- 3) 笹淵友一「『六人の処女』研究」『比較文化』1954：昭和29年 pp.1-22
- 4) 瀬沼茂樹『島崎藤村 その生涯と作品』日本図書センター 1984：昭和59年 p.33 によると、毎月7円の報酬だったとある。
- 5) 伊藤一夫『島崎藤村事典』新訂版 明治書院 1982：昭和57年 p.629
- 6) 佐藤三武朗「藤村とシェイクスピア」島崎藤村学会編『論集 島崎藤村』所収 おうふう 1999：平成11年 p.81
- 7) 栗本鋤雲は幕府医師の喜多村槐園の三男で、栗本家の養子となり医師になった。小事件によって士族になり箱館奉行として左遷される。しかし当地で後のフランス公使と知己を得てフランス語を習得、外国奉行になる。パリに滞在中維新になり、帰国後は郵便報知新聞の主筆となった。藤村『夜明け前』に喜多村という人物が登場するが、栗本鋤雲がモデルである。
- 8) おそらく心理学・哲学者の元良勇次郎（1858：安政5年－1912：大正1年）のことだと思われる。
- 9) 坂田精一『幕末外交談』1 平凡社東洋文庫 1966：昭和41年 p.257
- 10) 瀬沼茂樹前掲書 p.35
- 11) 日中文学文化研究学会 紅樓夢研究会口頭発表（2011：平成23年11月26日）／池間里代子「透谷と『紅樓夢』」流通経済大学論集Vol.46, No.3, 2011. 11 pp.17-25
- 12) 『明治文学全集』4 筑摩書房 1969：昭和44年 p.409
- 13) 佐々木冬流前掲書 pp.43-44
- 14) 日中文学文化研究学会 紅樓夢研究会編『東京紅学レポート』第1号 2011年 p.16
- 15) 田邊龍子の雅号は、跡見花隠より「花」を取ったが、「圃」は田邊の「田」にちなんだか、或いは『紅樓夢』作者といわれる曹霑の号「芹圃」より取ったとも考えられる。
- 16) 田邊石庵として『清名家小傳』4冊が1856：文政2年に「江戸両国横山町三丁目 和泉屋金右衛門」より刊行されている。ほとんどが明末から清にかけて活躍した文人に関する略歴であるが、巻1に見える「于成龍（1617：萬曆45年－1684：康熙23年）」について袁枚（1716：康熙55年－1797：嘉慶2年）がコメントしているものを引いている。袁枚は『紅樓夢』作者である曹霑とほぼ同時代の人であり、しかも彼の拠った「随園」は一時期曹家の別荘だったものを袁家が譲り受けたという因縁がある。
- 17) 伊藤一夫前掲事典p.274および坂田精一前掲書pp.251-255

- 18) 宮本百合子『現代日本文学大系 (5)』筑摩書房 1969 : 昭和44年 p.455
- 19) 明治文学全集62『明治漢詩文集』筑摩書房 1983 : 昭和58年 pp.406-407
- 20) 池間里代子「荷風と『紅楼夢』」国際関係研究 (日本大学国際関係学部国際関係研究所) 第32巻第1号 2011 : 平成23年 p.120 / 田邊朔郎編『蓮舟遺稿』文 40頁「来青閣記」:『詩集 日本漢詩』第19巻 汲古書院 1989 : 平成1年 p.579所収
- 21) 『藤村全集』第16巻 筑摩書房 1967 : 昭和42年 p.57 ルビは省略した
- 22) 「之」の上点のない字形。「也」の草書体。山田勝美『難字大鑑』柏書房 1976 : 昭和51年 p.9
- 23) 伊藤漱平『紅楼夢』上 平凡社奇書シリーズ1973 : 昭和48年 pp.160-162
- 24) 伊藤漱平前掲書 pp.160-162
- 25) 紅楼夢研究会編前掲書 p.1
- 26) 高阪薫「『若菜集』の主題と構造」甲南大学紀要文学編 (25) 1976 : 昭和51年 p.31
- 27) 伊藤漱平「日本における『紅楼夢』の流行」『伊藤漱平著作集』第3巻 2008 : 平成20年 汲古書院 注 53 pp.215-216
- 28) 『比較文化』第1号 東京女子大学比較文化研究所 1954 : 昭和29年
- 29) 明治書院 1960 : 昭和35年 第2節「藤村の文学的教養 その二」pp.807-808
- 30) 島崎藤村『島崎藤村集 (一)』筑摩書房 1968 : 昭和43年 p.6
- 31) 伊藤漱平前掲書 上 p.229
- 32) 笹淵友一前掲論文 p.5
- 33) 高阪薫前掲論文 p.37
- 34) 水本精一郎「恋愛詩における発想の構造 島崎藤村『若菜集』論2」山口大学文学会誌 (41) 1990 : 平成2年 p.96
- 35) 高橋昌子「島崎藤村 遠いまなざし」和泉書院1994 : 平成2年 p.214
- 36) 笹淵友一前掲論文 p.6
- 37) 高阪薫前掲論文 p.38
- 38) 水本精一郎前掲論文 p.99
- 39) 高橋昌子前掲論文 p.214
- 40) 岸規子「『若菜集』私見」『島崎藤村研究』第26号 1998 : 平成6年 p.21
- 41) 笹淵友一前掲論文 p.10
- 42) 高阪薫前掲論文 p.38
- 43) 高橋昌子前掲論文 p.214
- 44) 岸規子前掲論文 p.21
- 45) 伊藤漱平『紅楼夢』上 平凡社 1973 : 昭和48年 p.377
- 46) 伊藤漱平前掲書 下 p.105
- 47) 笹淵友一前掲論文 p.14
- 48) 高阪薫前掲論文 p.38
- 49) 岸規子前掲論文 p.21
- 50) 笹淵友一前掲論文 pp.19-22
- 51) 高阪薫前掲論文 p.39
- 52) 水本精一郎前掲論文 p.101
- 53) 笹淵友一前掲論文 pp.1-2
- 54) 『紅楼夢』は第1回に「空空道人、しばし思案のすえ、この『石頭記』にいま一度細かく目をとしてみました。…道人は改名して情僧と名乗るとともに、『石頭記』を改めて『情僧録』としました。やがて呉玉峯の手で『紅楼夢』と命名され、東魯の孔梅溪は『風月宝鑑』と名付けました。のちに曹雪芹が悼紅軒にて十年がかりでこれに目をととし、…『金陵十二釵』と命名した」とあり、別名の歴史が述べられている。  
伊藤漱平前掲書『紅楼夢』上 p.7
- 55) 杜軼文「笹川臨風 (種郎) の中国文学研究」二松学舎大学人文論叢80 2008 : 平成20年 p.128
- 56) 佐藤三武朗前掲論文 p.82
- 57) 水本精一郎『島崎藤村研究—小説の世界』近代文藝社 2010 : 平成22年 p.37
- 58) 相馬庸郎『一冊の講座—日本の近代文学4 島崎藤村』有精堂1983 : 昭和58年 p.168